

「今日の検査指針 第2版」

自治医科大学教授 河合 忠
 東京慈恵会医科大学助教授 橋本 信也 総編集
 佐賀医科大学教授 只野壽太郎
 東京慈恵会医科大学学長 阿部 正和 臨床監修

今日の医療に臨床検査が必要欠くべからざるものであることはいうまでもない。症状・症候の客観的把握から疾患・病態の診断、重症度・予後の判定、治療中の病状と副作用のモニター、治療判定に至るまで臨床検査が利用されている。最近では、病気の早期発見・予防のための検診や健康診断にも成果を挙げている。この背景には臨床検査、特に検体検査の目覚ましい進歩がある。分析装置の発達と精度管理手法の研究開発により検査データの信頼性は著しく高くなった。今や、検査の自動化・簡易化とあいまって、臨床医はいつでもどこでもすばやく正しい臨床検査のデータを得られるのも夢ではなくなりつつある。

このような臨床検査の進歩自体は素晴らしいことであるが、これを利用する臨床医は“多々益々弁ず”ではすまされない。患者の受けるいろいろな負担、特に医療費の高騰が健康保険制度を圧迫しつつあることは周知の事実である。今こそ臨床医は何を目的として検査を選び、組み合わせ、その結果をいかに読むか、という検査の基本を身につけなければならない。とはいえ、検査の専門分化は著しく、保険診療に採用されている検査項目だけでも700種類を越えており、その全域にわたって専門的知識を持つことは不可能である。では、どうすればよいのか。このニーズにぴったりと応えてくれるの

が、このたび版を改められた「今日の検査指針」である。既に評価の定まっている「今日の治療指針」と「今日の診断指針」を合わせた三部作の1つである。

本書は内容を大きく2つに分けることができる。前半は、第1章「症状別検査の選び方・考え方」、第2章「臓器・系統別検査の選び方・考え方」、第3章「経過観察のための検査」であり、後半は第4章「検査項目一覧」である。いうまでもなく、診療は問診と診察から得られた症状と身体的所見からスクリーニング検査を行い、検査結果から診断なり病態をかなり絞りこんでから、2次検査に進むのが通常のパターンである。本書ではまさにこの順序で検査が解説されている。診療のスタートとなるプロブレムは、全身症状と臓器別症状に分けられ、症状・症候だけでなく、スクリーニング検査で発見される検査異常まで網羅されている(148項目)。各項目について、まず[検査項目の選択と組み合わせ]でスクリーニングとなる検査をあげ、次に[検査の進め方・成績の読み方]で2次検査も含めて診療のポイントをおさえて解説している。更に精密検査を必要とする場合は、第2章の「臓器・系統別検査の選び方・考え方」(84項目)が用意されていて完璧である。

後半の第4章「検査項目一覧」は、索引のような印象を受けるが、

実はこれだけで検査辞典としても立派に通用する内容である(520項目)。測定の意味、結果の解釈、留意事項、正常値・異常値、の順に解説されている。正しい検査成績を得るためには、検体の採取・保存は臨床医の責任であり、この点に限っても新しい検査、なじみのない検査を施行するときは、あらかじめ本書の留意事項に目を通すようにしたいものである。

強いて難をあげれば、取り上げられている症状・症候に一部重複がみられる。食思不振や浮腫は全身症状と消化器・循環器症状に、胸痛と呼吸困難は呼吸器と循環器の症状に共にあがっている。執筆者別で視点が異なるといっても一工夫はしいところである。検査の進め方では、総花的な傾向がなきにしもあらずである。実際の診療を念頭において頻度の高い疾患、重要な疾患に焦点を合わせた検査の解説を望みたい。ゴシック体にするとか下線を引くとかして強調するだけでも多忙な読者には役に立つと思われる。本書が検体検査中心の編集であることは承知しているが、胸部単純X線、EKG、腹部超音波検査は今やスクリーニング検査として必須のものである。次の版では是非、独立項目として解説を希望する。

冒頭にも述べたごとく、臨床検査を抜きにして医療はあり得ないが、これを真に病人のために活かせるか否かは臨床医の責任である。“検査の指針”を与えてくれる本書を座右の書として広く活用されることを期待するものである。

(天理よろづ相談所病院・総合診療教育部部長)
 今中 孝信

●B5 846頁 図115 写真1
 1991年 定価11,845円(税込)
 〒400円

医学書院 刊(☎03-3817-5657)